

市 の 変 遷

河内長野市域に人々の生活が始まったのは今から約1万3千年前の旧石器時代のように、寺ヶ池や三日市町から当時の道具である旧石器や縄文時代の石器、土器が発見されている。そして、農耕が開始された弥生時代になると石川に沿って木戸町や大師町、三日市町にはムラがつくられている。さらに、古墳時代にも三日市町にムラが、そして、石川の各支流を見下す丘陵の上には古墳が築造されている。7世紀頃になると高向にはおおきなムラが営まれ、律令国家の体制が整うと、この地域は錦部郡とよばれるようになった。この錦部郡の由来となった錦部氏はその祖が百済からの渡来人であった。

仏教の興隆とともに各地に寺院が建立され本市域も例外ではなく、河合寺や観心寺、金剛寺が建立されている。これらの寺院が興隆するのは平安時代から朝廷や院、さらには武士からの荘園寄進が盛んになり広大な荘園主となってからである。そして南北朝時代には金剛寺や観心寺が朝廷や楠木氏との結びつきから南朝と特に深く関係し、一時これらの寺院は南朝の拠点となった。

また、鎌倉時代から室町時代にかけて、高野山へ詣でるための高野街道が整備され街道沿いにはこの時代のムラがみつまっている。

近世になると本市域は「天保郷帳」によると37カ村あり、それらが膳所、神戸、狭山、西代等の各藩や旗本の知行地、幕府領に分割支配された。

明治初年、河内県、堺県、五条県と変遷し、現在の大阪府へと続く。明治22年4月市制、町村制公布の時発足した長野村ほか7カ村が今日の基礎をなしている。明治43年4月1日長野村に町制を施行、昭和15年6月1日に長野町、千代田村、天野村が合併して長野町となった。昭和29年4月1日長野町、三日市村、高向村、加賀田村、天見村、川上村の6カ町村が合併し、市制を施行して河内長野市が誕生し、今日に至る。